

【木曾進水日記念小説】木曾とまつたり鉄道旅

ゆらゆらするやつ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

お休みを取った提督と木曾が北の大地のローカル線をのんびり待つたり旅します

短編1つだけど加筆したりシリーズ化するなりしてコミケに委託するかもしれません（後述）

【木曾進水日記念小説】

木曾とまつたり鉄道旅

目

次

【木曾進水日記念小説】木曾とまつたり鉄道旅

「10番線から石狩当別行きまもなく発車です。だあ閉めますー足元お氣をつけてください」

ホームでメー○ルみたいな分厚いコートを着た駅員が声を張り上げる

ターミナル駅らしい喧噪。

私はクロスシートの車両の席に一人で腰掛けた。

隣には緑の髪で眼帯をつけたちよつと目立つボーカルシユな女の子

子

彼女は艦娘の「木曾」

普段はマントにサーベルを携えているのだがさすがに普通のお出かけでは外している

白を基調としたセーラーにスカート。落ち着いた感じの私服。天使みたいでとてもかわいらしい

素直にそう言うと木曾は柄にもなく顔を真っ赤にしてうつむいた。

モーターの音とカタンと揺れる車両

旅が始まる。

「ていうか木曾？ 進水日なのにこんなデートでいいのか？」

「こんなのとか言うなよー。俺は貴様と鉄道旅に行くのが一番の樂しみなんだ。嬉しくて仕方ない！」

きそは本当に嬉しそうに笑顔を向けてくれる

左に線路が分かれ、高架の線路を駆けていく。

周りはもう雪で真っ白だ。

「温かいお茶を入れてきたんだが飲むか？」

「木曾は本当に気遣いができるなあ。……ありがとう。ほら、木曾の分も」

ふたりで小さなコップに入つたあつついお茶をふーふーしながら飲む

外を見ると大きな橋の上。下り終えるとそこは『新琴似』。

「このあたりは駅の間が結構短いんだねー」

「ずっと住宅地だしなー。人の出入りも激しいね」

新琴似を過ぎると高架が終わり視点が低くなる。やっぱり住宅のど真ん中をカタンカタンと走つて行く

通勤列車なのになぜかローカル線ののんびりした雰囲気があるのが面白い。

昔のつた新潟の越後線みたいなかんじ?

「わかりにくい例えはやめような」

いつしかロングレールから短いレールに変わり左には防風林。さらにローカル線度が増していく

「いろんな顔があつて飽きないのがこの路線の好きなところ」

前来たときも木曾はそんなことを言つていたつけ

そしてあいの里教育大を過ぎてしばらくすると

今までの住宅街が嘘のようにさっぱり無くなり、列車は広い田んぼの中。

「ここから!!　ここからがたまらない!!」

木曾のテンションも徐々に上がっていく。

その直後に見えたのは「橋」

もうこれは大きな。見事な橋だ。広い広い石狩川をまたいで電車はその先を目指す。

両側にエンスがあるのが残念だけど、乗つているだけで幸せなのでおつけーね!!!

『まもなく石狩当別、終点です』

あつという間に列車は石狩当別に滑り込む。

二人を含め多くの鉄道好きと思われる客が向かいのちっちゃなディーゼルカーに乗り込んでいく

「……からが札沼線の本番!」「貴様……よくわかっているじゃないか」

きそもそも私もすっかりテンションが上がっている

キハ40。国鉄時代の車両だが今まで北海道各地を爆走しているいぶし銀な車両（提督の勝手な解釈）

車内の座席は既に埋まっているようだ。

「ふん……」んなの想定済みだ

と一言言つた後木曾は最後尾へ

「通は後ろにかぶりつくものなのさ」

なんかかっこいいこと言つてるつもりらしい。かわいい。始発駅でドア全開だから寒くてガタガタ言つてるけど。

『ぐお（おおおおおお）（う）（う）（う）お』

『Kitaca利用エリアは次の「北海道医療大学」までです。それより先をご利用のお客様は切符をお求めください』

さつき乗つていて列車とはうつて変わつて轟音を響かせながら駅を発つキハ40

「……ありだな」

本当に木曾が満足そうで何よりだ。

そして私は木曾から「後ろかぶりつき」の素晴らしさを延々と教授されて いるのであつた。

「きそー」「なんだ?」「てー冷たいからてーつな（うよ）」「貴様は突然どうしたんだ」

そう言いつつも木曾は手を伸ばしてくれる。木曾の手も少し冷たかつた

たしかに……うしろは人がいないし乗り降りの邪魔にもならない。後ろの景色をふたりつきり独占できる。なんて贅沢な。

冬晴れの石狩平野をしつかりと堪能する二人であつた

次々に流れては消えていく雲と空と森と林と白い原っぱに電柱。

たまにくるま。遮断機のない踏切。

目に映るもの、一つ一つを手をつないだままそと数える。彼女の手はもう温かい

「まもなく、終着。新十津川です。どなた様もお忘れ物無いようお気をつけください」

列車は小さな小さな駅に着いた。札幌駅から3時間で線路も駅も周りに見えるものは全く違う

最後のお客さんは一人で手をつないだまま列車を降りた。外には雪がちらつきはじめる。

普通なら喜んだりするものだが、北の大地に慣れすぎたふたり、ましてはアリューシヤンのほうまで毎月行つてゐる木曾にはそれよりも魅力的なものが目の前に

「地酒が売つてゐたいだ」「お菓子も売つてゐ！」「ポストカードも！」

二人は売店にまつすぐ向かいそれぞれのすきなものを買つていつた

「このクッキーの写真は夕方のものだけどこの光景はもう見られないんだつて」

「ああ、今日の前にある列車が『上り始発かつ終電』だからな」

時間はまだ午前の10時にならないくらいなのに。木曾によると次の春には廃止が決まつてゐるとか。

そうか。だから席が埋まつていたのかー

発車時間が近づき、二人は列車に乗り込む。帰りは座席に座ることができた。駅で買ったものはみんなへのお土産にする

持つてきたお菓子を少しつまんで、行くときと同じように熱いお茶をふーふーして飲んで、

今度は座つている私のももの上の手に木曾の方から手を重ねる

もう何度聞いたかわからないディーゼルの轟音とともに、1両の列車はゆつくりと動き出す

気がつくと私は眠っていたようだ。車内は暖房が効いていて、うたた寝するには絶好の環境だつた

ローカル線で揺られながら寝る以上の楽しみはないよなあ。これが乗り鉄の真骨頂だと思う。

ふと隣をみると木曾もやっぱり寝ていた。彼女の手は私の手の上に重ねられたまま

嫁の寝顔を見るのは久しぶりかもしれないな。

相変わらず天使みたいな『私は幸せで仕方ないです』みたいな顔をして。すうすうと寝息を立てていた

きそに気づかれないように私は自由になつている反対の手でそつと頭をなでてから、

私は子供のように外の景色を食い入るように見入ることにしよう

札幌につく頃はまだお昼。大湊からの迎えにはまだ時間があるから……

小樽でお菓子の食べ歩きをしようか、イルミネーション巡りもいいし久しぶりに映画に行くのもありかも知れない

明日からはまた警備府の仕事がある。今日だけ、二人だけの自由な時間。

たっくんさんあそんでたくさん思い出を作りたい。じつはちょっとしたサプライズも用意してある

きっと木曾なら喜んでくれるはずだ。

この先の楽しいことを考えながら、私は冬のローカル線に揺られていた。